

第 1 編

総 説

— 内 容 —

1 入間市のあらし	1
2 市域の変遷	5

1 入間市のあらし

(1) 沿革

入間市の歴史はかなり古くまでさかのぼることができる。すでに、縄文時代に先人が住みついていたことは縄文式土器の発掘によって明らかにされており、その中でも坂東山遺跡は最大で住居跡や土器等が数多く発掘されている。

入間市の古代における遺跡のうち、代表的なものとして東金子釜跡群があり、ここでは主に国分寺瓦が造られた。聖武天皇時代、全国に設けられた国分寺に奉獻された瓦のなかには、入間の郡名を見ることができる。

中世においては、武士団が勢力をもち入間市でも村山党の金子氏、宮寺氏及び丹党の加治氏などが武蔵武士団の一員として活躍した。この時代の史跡として瑞泉院には、金子氏一族の宝篋印塔がみられ、高正寺にも巨大な板碑が遺されている。

また、入間市を初めとする周辺地域に遺された板碑は、数多く中世期における当地方の活動状況を表すものであり、特に円照寺の加治氏板碑は同氏が政治的にも深く係わりをもっていたことを示している。

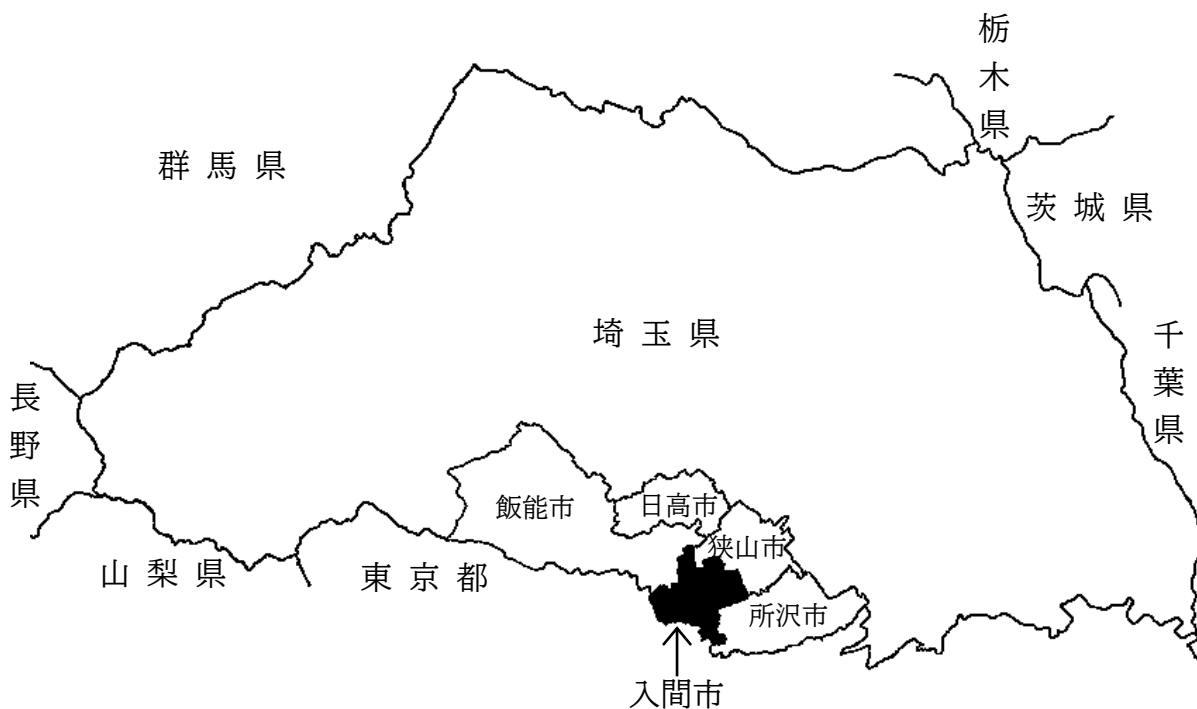
江戸時代当地方は、天領、藩領、旗本領と支配が入り混じっていたものの経済活動は活発化していった。特に江戸末期において扇町屋は、穀物市や木綿市が立ち、地域経済の拠点として栄えた。

明治期に入り、現在の入間市の原型ともいえる町村（豊岡町、金子村、宮寺村、藤沢村、東金子村、元加治村、元狭山村）が成立し、また繊維工業のめざましい発展がみられた。

戦後、町村合併が促進され、昭和31年9月30日、豊岡町、金子村、宮寺村、藤沢村及び西武町の一部（旧東金子村）をもって合併し武蔵町が発足した。その後、昭和33年10月、元狭山村の一部を編入し、昭和41年11月1日、埼玉県で25番目の市として「入間市」が誕生した。さらに、昭和42年4月1日、西武町を編入し現在の市域を構成するとともに首都圏近郊都市としての行政基盤が確立された。

(2) 位 置

本市は、都心から 40 キロメートル圏に位置する緑に恵まれたまちである。面積は 44.69 平方キロメートルで東西 9.3 キロメートル、南北 9.8 キロメートルの菱形をなしており、周囲は、埼玉県所沢市、狭山市、飯能市及び東京都青梅市、瑞穂町にそれぞれ接している。



(3) 地 勢

市域全体は、海拔 60 メートルから 200 メートルのややなだらかな起伏のある台地と丘陵からなり、市東南端と西北端には、それぞれ狭山丘陵と加治丘陵とがあり、市域の約 10 分の 1 を占める茶畑とともに緑の景観を保っている。

また、市の西北部には荒川の主流である入間川が流れ、中央部に霞川、南部に不老川がそれぞれ東西に流れ、優れた景観をなしている。

地質は、地表が軽い植質壤土で、地下は関東ローム層と呼ばれる砂壤土質の洪積火山灰土でそれぞれ形成され、肥沃な地味は茶樹、野菜等の栽培に適している。

(4) 交 通

本市の鉄道網は、私鉄の西武鉄道池袋線と JR 八高線の 2 路線である。前者は、都心へ通じる主要交通機関であり市民の通勤通学者のほとんどが本線に集中している。なかでも入間市駅、武蔵藤沢駅の利用者が多い。後者の八高線は、市の最西端を縦断する路線であるが、地域住民にとっては重要な交通機関となっている。

次に、道路は首都圏外周部の環状路線である一般国道 16 号をはじめ、299 号、407 号と、463 号の 4 路線が、また県道として青梅入間線外 8 路線があり、地域交通上の基幹道路として重要な役割を担っている。また、平成 8 年に首都圏中央連絡自動車道（圏央道）が開通し、入間インターチェンジが国道 16 号と接続したことで、広域的機能を高めた交通網を形成している。

路線バスは、そのほとんどが入間市駅を起点として運行されている。近年、自家用車等の著しい普及がみられるが、バスを唯一の交通手段としている市民も多く、バス路線の整備拡充を望む声は依然として高い。現在、市民の日常生活上の交通手段の確保と高齢者や障害者等に配慮した交通手段の確保を目的に、入間市コミュニティバス「ていーろーど」・「ていーワゴン」を運行している。

(5) 産 業

本市の工業は、製造業を中心とした中堅・中小企業で構成されている。地場産業である製茶業に加え、武蔵工業団地、狭山台工業団地及び 2 つのミニ工業団地の造成により、電気・機械・自動車関連工業が中心的役割を担ってきた。

また、商業については、中心市街地活性化区域内にある 2 つの商店街振興組合を始め、商店街や商工会支部が商業活動を展開しているが、近年は、近隣市町を含む郊外への大型商業施設の出店やネットショッピングなど消費者の購買動向の変化が商業環境に影響を与えている。

今後は、少子・高齢社会が伸展する中で、環境・福祉関連・サービス産業等の新たな展開が望まれている。

(6) 観 光

市の南東部に狭山丘陵、北西部には加治丘陵があり、入間川、霞川、不老川と 3 本の河川が流れている。市域の約 10 分の 1 の茶畑は、丘陵とともに貴重な自然の宝庫であり、この地域特有の自然豊かな都市景観を形成している。中でも加治丘陵は、北・南コース、自然探勝路などの遊歩道が整備され、地域住民の他、駅に近く位置していることで鉄道を利用したハイキング愛好家も散策を楽しんでいる。

また、本市は戦後、現在の航空自衛隊入間基地が米軍基地だった歴史から、洋風の文化が残っている。その文化を活かしつつ、新たな暮らしを融合したことが魅力として、人を引き付けている地域がある。

(7) 姉妹都市

佐渡市（新潟県） 昭和61年10月12日提携

佐渡市は、平成16年3月1日、姉妹都市旧両津市と7町2村が合併し誕生した。新潟港から約67kmの海上にある佐渡市は、面積約855km²、人口約50,000人、海の幸、山の幸にも恵まれ、輝かしい歴史と文化に彩られた都市である。

物産品の紹介、郷土芸能団体の派遣・受け入れ、文化団体・スポーツ団体の交流等、両市の相互発展・理解に努めている。

ヴォルフラーツハウゼン市（ドイツ連邦共和国） 昭和62年10月14日提携

ヴォルフラーツハウゼン市は、ミュンヘン市から南へ約30kmに位置し、面積約8.74km²、市の西側にロイザッハ川、東側にイーザル川が流れる人口約19,000人の都市である。農業主体でアルプスの山々が近くに見える田園風景の美しい街で、ミュンヘンで働く人々の高級住宅地としても発展している。

(8) 友好都市

奉化区（中華人民共和国） 平成12年5月16日提携

奉化区は、浙江省寧波市にある行政区で上海から南へ約300kmに位置し、面積約1,277km²、東シナ海に面する人口約586,000人の都市である。2016年に奉化市から奉化区となった。特産品が豊富で、タケノコ、サトイモ、中でも水蜜桃の産地として有名で「中国水蜜桃の郷」と称されている。区域の66%は森林であり、水資源が豊かで、名所旧跡にも恵まれている調和のとれた都市である。

2 市域の変遷

